

姥捨山と老人論

先日、CMにでていた「加山雄三」さんをテレビで見ました。どんなCMだったのか、恥ずかしながら内容をよく覚えていません。確か健康食品関係のCMだったような気がしています。(私もそろそろ短期記憶があやしくなっています。)係留してあるヨットの前を軽やかに(?) ジョギングしているではありませんか。いつまでも元気な「若大将」は、いったい幾つなんだろうと、ふと気になり、調べてみたところ、1937年4月生まれのなんと74歳。改めて加山雄三さんを見直すと同時に、何故か新藤兼人監督の映画作品『生きて』(1998年)が頭に浮かんできました。

映画『生きて』のあらすじは、「長野県にある姥捨山にひとりの老人安吉(三國連太郎)が降りたが、姥捨山の不気味な雰囲気と恐れをなし、逃げるように引き返します。妻と死別し15年、年齢70を超え失禁をすることもしばしば。立ち寄った馴染みのママの店でも粗相をしてしまい、追い出されてしまう。その上、糞まみれで道端に寝てしまい、病院に担ぎ込まれてしまいます。病院からの電話で父安吉を迎えに来たのは、嫁ぎ遅れの長女徳子(大竹しのぶ)。長男と次女はさっさと家を出て家庭をつくっており、躁鬱症を抱える長女徳子が父安吉の面倒を看ています。「迷惑ばかりかけて」と徳子になじられる日々。安吉は衰えゆく体と崩壊した家族を思い、ついに老人ホームへの入居を決めます。果たして、そこは現代の姥捨山なのでしょうか。安吉の信じる姥捨山伝説では、窮地に陥った村の危機を一人の年寄りの知恵が救い、これを機に老人は大事にすべきだとして姥捨が廃止される?……。いつか娘徳子が連れ戻しに来ることを期待して、ホームで暮らす安吉。厄介者だった父が居なくなってせいせいした筈の徳子でしたが、やがて独り暮らしは心が落ち着かなくなり、ホームに安吉を連れ戻しに行きます」・・・映画はまだ続きがあるのですが。

未だ青春を謳歌しているがごとくの「加山雄三」と比べて、新藤監督が描いた主人公「安吉」とどうしてこれほどの違いが出てくるのでしょうか。

新藤監督は、「老人は、世の荒波を越えて、欲も徳も超越し、人格円満、平和を愛し、家族からは尊敬されている。これが老人のイメージであった。ところが80を超えて思うに、そんなにおだやかなものではなく、妄執、欲望、確実に死に向かって一步一步ちかづいている恐怖、家族に疎んじられている口惜しさといった世界の中に老人はいる」と本に書かれています。

私は、幾つになっても 「…あしたも すばらしい 幸せがくるだろう
…ふたりの心は変わらない いつまでも 幸せだナァ 僕は君といるのが
一番幸せなんだ 僕は 死ぬまで君を離さないぞ いいだろう」と言い続けて
いたいと思います。

勿論、家族(特に家内)から見捨てられないようにすることが必要ですが(冷汗!)

